

## 育児期における女性のアイデンティティ様態と 家族関係に関する研究

岡 本 祐 子

(広島大学教育学部)

平成7年7月17日受理

A Study on Women's Identity and Family-Relationship in Child-Rearing Stage

Yuko OKAMOTO

*Faculty of Education, Hiroshima University, Higashi-Hiroshima 739*

The present study was designed to investigate the relationship between women's identity achievement and family-relationship, and to discuss the aspects of identity integrity from the viewpoints of personal identity and mother identity in child-rearing stage.

Data were obtained on the basis of questionnaire distributed to 147 mothers who had children of 3-5 years old. Subjects were divided into the following 4 types based on the scores of Ego Identity Scale (Rasmussen, 1964) and Motherhood Concepts Questionnaire (Hanazawa, 1992):

I: The Integrated; II: The Traditional; III: The Independent; and IV: The Immatured.

The results are summarized as follows:

1) The integrated mothers were satisfied with the family life more than the immatured mothers, and recognized to be better understood and accepted by their husbands better than the traditional mothers.

2) Considerable differences were clarified in family-relationship among the 4 types mentioned above by SCT analysis. The integrated mothers perceived their husbands most positively and were committed most actively to their families. On the other hand, the immatured mothers had the tendency to reject their husbands and children, and not to make active commitment to their families.

It is suggested that positive relationship with husband and active commitment to family were instrumental for mothers to achieve matured identity, *i.e.*, to integrate personal identity and mother identity.

(Received July 17, 1995)

**Keywords:** integraion of identity アイデンティティの統合, mother identity 母親アイデンティティ, family-relationship 家族関係, child-rearing stage 育児期.

### 1. 緒 言

今日、成人女性のライフコースは多様化し、ポスト子育て期の空の巣症候群などをはじめとして、成人期においても女性特有の発達の特徴や危機が存在することが認識されるようになってきている。これまでアイデンティティの発達は、個の発達としてとらえられることが多く、家族に関する問題は単なる背景要因の一つと見なされる傾向にあった。しかしながら、アイデンテ

ィティは、個の確立によって発達、深化していく側面と同時に、他者との関係性によって成熟していく側面も存在する。特に成人期においては、人はさまざまな社会的役割や家庭的役割を担い、複数のアイデンティティを有する。多くの成人男性は、職業人としてのアイデンティティを太い幹としたライフコースを歩むのに対して、女性は職業、家庭、個というさまざまなアイデンティティを自己の内部で統合しつつ、成人期を

生きることが求められる。

Levinson<sup>1)</sup>, Sheehy<sup>2)</sup>, Vaillant<sup>3)</sup> などの成人発達研究によると—その多くは男性を対象にした実証的研究であるが—30歳から30代半ば頃までの時期は「一家を構える時期」(Levinson)<sup>1)</sup>, 「根付きと自己拡大の時期」(Sheehy)<sup>2)</sup> など、比較的安定した時期であるとされている。しかしながら、多くの女性の場合は、20代後半から30代半ばまでは出産・育児期にあたり、一つのアイデンティティ葛藤の時期にあたりと考えられる。すなわち、後述するようにこの時期は、結婚・出産までに形成してきた個としてのアイデンティティと、新たに母親になることによって獲得されるべき母親アイデンティティが、しばしば葛藤を引き起こすことが指摘されている。個としてのアイデンティティが、乳幼児期からの重要な他者への数々の同一化の主体的選択と統合の結果として獲得されるのに対して、母親アイデンティティは、母親役割の反映として獲得されるアイデンティティ (reflected identity) である。この両者を自己の中でどのように両立、調和させ、統合していくかは、現代女性にとっては必ずしも容易なプロセスではない。

たとえば、大日向<sup>4)</sup> は、昭和初期、昭和20~25年、昭和45年前後の三つの時期に子育てをした女性の育児の意義や育児に対する意識に関する世代間比較を行い、現代女性は、自己の生きがいは母親であることとは別のものである傾向にあることを見出している。また岡本<sup>5)</sup> は、多様に分化していく成人女性のライフコースを1本の木に見立て、どのライフコースを歩んだにせよ、その途上でアイデンティティの危機に遭遇することを指摘している。そして、出産・育児期は、職業をもつ、もたないにかかわらず、個としてのアイデンティティと母親としてのアイデンティティの葛藤が顕在化する時期であると述べている。少子化が進む今日であっても、多くの女性が子育てを体験しつつ成人期を生きることにはかわりない。そして母親としてのあり方は、成人女性のもつ複数のアイデンティティの中でも重要な意味をもち、アイデンティティの発達にも深く関連していると思われる。

一方、牧野<sup>6)</sup> は、育児期の女性を対象に、育児不安と社会的な人間関係や夫婦関係の関連性を分析し、育児不安の程度は母親の社会的関係の広さや夫との関係に規定されていることを見出している。この研究も示唆しているように、母親である自己の安定は、単に母親個人の問題ではなく、女性をとりまく家族や社会の

問題としてとらえる必要があろう。

そこで本研究では、育児期の女性のアイデンティティ様態を、① 個としてのアイデンティティの達成、② 母性意識の確立、つまり母親であること・母親役割の反映として獲得される母親アイデンティティの達成という二つの次元からとらえ、

① 育児期の女性のアイデンティティ様態の状態像について検討する、

② 育児期の女性における上記の二つのアイデンティティの統合のあり方と家族関係に見られる特徴の関連性について考察する、

以上の2点を目的とした。

周知のように「アイデンティティ達成」とは、Erikson<sup>7)</sup> によって青年期の心理・社会的課題として提唱された概念であり、アイデンティティ形成がうまく進行し、アイデンティティが確立された状態を示している。「アイデンティティ達成」の対極の状態を示すのが、「アイデンティティ拡散」状態である。本研究で用いている「アイデンティティ葛藤」の概念は、「アイデンティティ拡散」状態ではなく、青年期、成人期に獲得された複数のアイデンティティが、互いに葛藤を引き起こしている状態を示す。また、「アイデンティティ統合」とは、これらの複数のアイデンティティが個人の中で調和し、統合されていることを意味する。

## 2. 方 法

### (1) 調査対象者

H市内のA幼稚園児の母親147名、平均年齢33.2歳、対象者の83.0%が核家族、76.6%が専業主婦であった。

### (2) 手 続 き

以下の内容からなる質問紙調査を行った。

① Rasmussen<sup>8)</sup> の Ego Identity Scale を翻訳、標準化した61項目からなるアイデンティティ尺度、② 花沢<sup>9)</sup> の母性理念質問紙27項目、③ 家庭生活、夫との関係、夫の育児・家事への協力などに関する5ポイント・スケールの質問4項目、および自分の人生、生きがい、子育て、夫との関係などに関する文章完成法(SCT)6項目。調査は留め置き法により1994年9~10月に行った。

### 3. 結果および考察

#### (1) アイデンティティ様態の定義と分類

本研究では、育児期の女性のアイデンティティ様態を、① 個としてのアイデンティティの達成度と、② 母性意識の高さの2次元でとらえた。

Rasmussenのアイデンティティ尺度は、Erikson<sup>17)</sup>の精神分析的個体発達分化の図式 Epigenetic Scheme に示された第I～第VI段階の心理・社会的課題の達成度によって、1次元的にアイデンティティ達成の程度を測定しようとしたものである。この1次元的な測定法に対しては、Marcia<sup>18)</sup>らの批判も見られるが、Rasmussenのアイデンティティ尺度は、今日においてもなお、米国やわが国において広く用いられているアイデンティティ測定法の一つであり(鐘ら<sup>19)</sup>)、意識レベルでの個としてのアイデンティティ達成度を測定する尺度としては妥当であると考えられる。

一方、花沢の母性理念質問紙は、伝統的な母親役割を肯定する内容の項目(以下、肯定項目と記す)と、伝統的な母親役割を否定する内容の項目(以下、否定項目と記す)からなる。母性理念とは、花沢<sup>9)</sup>によれば、「母親であることの自覚にもとづく妊娠・分娩・育児への態度や価値観」と定義されている。今日まで、「母性」あるいは「母性意識」という言葉は明確に定義されないまま、日常的に広く用いられているが、上記の花沢の定義は、女性の中の「母親としての自己意識」を表現しているものと考えられる。本研究においては、花沢のこの母性理念の定義にもとづいて母性意識をとらえ、母性理念質問紙を用いて母性意識を測定することとした。

本研究では、この個としてのアイデンティティと母親としてのアイデンティティが、個々人の中でどのように統合、あるいは葛藤しているかという視点から、育児期の女性のアイデンティティ様態について、表1のような4タイプを想定した。これらのタイプは、そ

れぞれI統合型、II伝統的母親型、III独立的母親型、IV未熟型と命名した。

これらのI～IVタイプは、理論的には質的に異なる次のような特徴をもつと考えられる。I統合型は、個としてのアイデンティティがよく達成されている。しかも母性意識も高いことから、母親役割を反映した母親としてのアイデンティティもよく達成されているタイプである。このタイプの人々は、個としてのアイデンティティの達成の上に母親アイデンティティもよく確立されており、両者をうまく両立させているタイプであると推察される。

II伝統的母親型は、個としてのアイデンティティの達成度は低い。しかし、母性意識は高いことから、母親役割を反映した母親アイデンティティはよく達成されている。このタイプの人々は、母親としてのアイデンティティが、自己のアイデンティティの中心を占めているため、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティの間の葛藤は少ないと考えられる。それに対して、III独立的母親型は、個としてのアイデンティティの達成度は高いが、母性意識は低い。このタイプの人々のアイデンティティの中心は、個としてのアイデンティティである。彼女らは、物理的には母親であるが、母親としての意識が乏しく、母親アイデンティティの確立が不十分な人々である。このタイプの人々は、4タイプの中で、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティの間に矛盾や葛藤を感じるものが最も多いと考えられる。

IV未熟型は、アイデンティティ達成度、母性意識ともに低く、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティの両方とも確立が不十分なタイプである。このタイプも、両者の間の葛藤を体験することが多いと考えられる。しかし、個としてのアイデンティティを大切にしたいがために、母親役割の遂行や母性意識が不十分になりがちなIII型と異なって、IV型の葛藤体験は、発達の未熟であるがゆえのものであると推察される。

個としてのアイデンティティ達成度は、Rasmussenのアイデンティティ尺度得点の平均値36.56を基準に、37点以上を「高」、36点以下を「低」と見なした。母性意識の高さは、花沢の母性理念質問紙の得点の平均値93.85を基準に、94点以上を「高」、93点以下を「低」と見なした。各タイプのアイデンティティ得点は表2に、母性理念得点は表3に示した。

以下に、各タイプに見られる母性意識、家庭生活や

表1. アイデンティティ様態の4タイプの定義

タイプ	個としての アイデンティ ティ達成度	母性意識 の高さ	人数
I 統合型	高	高	47
II 伝統的母親型	低	高	35
III 独立的母親型	高	低	30
IV 未熟型	低	低	35

表2. タイプ別のアイデンティティ得点

タイプ (人数)	各ステージ別得点						総得点	有意差 検定	
	I	II	III	IV	V	VI			
	(10)*	(10)*	(8)*	(11)*	(11)*	(11)*			(61)*
I 総合型 (47)	M	8.19	4.93	7.00	8.02	9.46	6.34	43.95	***
	SD	1.23	1.75	1.47	1.85	1.25	1.62	4.53	
II 伝統的母親型 (35)	M	6.00	3.17	4.77	5.20	6.54	3.88	29.57	
	SD	1.83	1.84	1.47	2.02	1.79	1.42	4.86	
III 独立的母親型 (30)	M	7.86	5.26	6.63	8.23	8.86	5.76	42.63	
	SD	1.52	1.82	1.30	1.97	1.33	1.47	4.02	
IV 未熟型 (35)	M	5.54	3.34	4.14	4.85	6.65	3.85	28.40	
	SD	2.06	1.97	1.35	2.07	1.56	1.58	5.49	
Total (147)	M	6.97	4.20	5.71	6.64	7.98	5.05	36.56	
	SD	2.03	2.05	1.86	2.50	1.99	1.91	8.67	

\* 項目数. \*\*\*  $p < 0.001$ .

表3. タイプ別の母性理念得点

タイプ	人数	得点	有意差検定
I 総合型 (47)	M	102.63	***
	SD	6.89	
II 伝統的母親型 (35)	M	101.59	
	SD	7.21	
III 独立的母親型 (30)	M	84.53	
	SD	7.86	
IV 未熟型 (35)	M	82.31	
	SD	9.22	
Total (147)	M	93.85	
	SD	12.20	

\*\*\*  $p < 0.001$ .

家族関係の特徴を分析し、最後にSCTの反応内容を総合して、育児期における女性のアイデンティティ統合のあり方について考察した。

#### (2) 母性意識の特徴

母性意識は、母性理念質問紙に対する反応をもとに検討した。母性理念質問紙は、肯定項目(18項目)に対してはそれぞれ、「非常にそう思う」5点～「全く思わない」1点、否定項目(9項目)に対しては「非常にそう思う」1点～「全く思わない」5点を与えた。したがって得点が高いほど、母性理念がよく形成されていることを示す。表4および図1は各々の肯定項目

の得点を、また表5および図2は否定項目の得点を示したものである。

母性理念得点は、すべての項目においてI総合型とII伝統的母親型は、III独立的母親型とIV未熟型よりも高得点を示した。この結果は、表1の定義から見て妥当なものである。

また各々の項目の得点を検討すると、4タイプ共通の特徴として、次のような点が見出された。全体的に肯定項目のうち、「子供を産んで育てるのは社会に対する女の務めである」(No. 10)、「育児は女に向いている仕事であるからするのが自然である」(No. 13)、「子供を産んで育てなければ女に生まれた甲斐がない」(No. 16)、「育児に専念したいというのが女の本音である」(No. 26)や、否定項目のうち「育児は妻だけでなく夫もすべきである」(No. 18)に対しては特に得点が低く、全対象者の平均値は、3.00未満の値を示した。これらの結果は、従来の母性理念、すなわち女性であることは即、よい母親であるべきであるという考え方を否定する傾向や、育児は女性だけがするものではないという現代女性の意識を明確に表している。このような現代女性の母性意識の特徴が4タイプに共通に反映されていることは注目すべきであろう。

#### (3) 各タイプに見られる家庭生活への満足感・夫婦関係の関連性

次に各タイプの家庭生活や夫婦関係の特徴を検討した。2.において記したように、本研究の対象者の83.0%が核家族、76.6%が専業主婦であり、I～IVの

## 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究

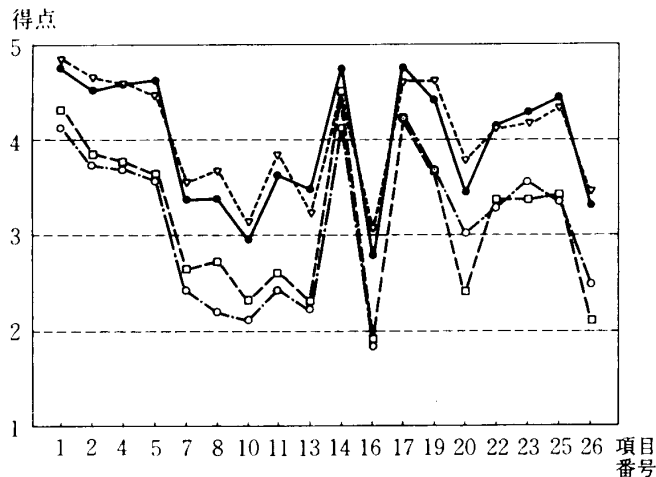


図1. 母性理念得点（肯定項目）

<肯定項目>(1) 妊娠は女にとってすばらしい出来事である。(2) 赤ちゃんを産むことができるのは女の特権である。(4) 赤ちゃんを産んではじめて子供のかわいさを感じる。(5) 赤ちゃんを無事産むためならどんな苦しみもがまんできる。(7) 女は子供を産むことで自分が生きた証拠を残すことができる。(8) どんなことをしても赤ちゃんは母乳で育てるべきである。(10) 子供を産んで育てるのは社会に対する女の務めである。(11) 女は子供をもつことで人生の価値を知ることができる。(13) 育児は女に向いている仕事であるからするのが自然である。(14) 子供を産んで育てることは自分自身の成長につながる。(16) 子供を産んで育てなければ女に生まれた甲斐がない。(17) 子供がいることで家庭生活はより楽しくなる。(19) わが子の成長を見とけるために長生きをしなければならない。(20) 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である。(22) わが子のためなら自分を犠牲にすることができる。(23) 子供を育てるのは生みの母が最良である。(25) わが子の存在を感じるだけで毎日の生活に張りが出る。(26) 育児に専念したいというのが女の本音である。

タイプ間には、家族形態、妻の有職率や有職者の勤務形態には大きな相違は見られなかった。家庭生活の満足感、夫の妻への理解の程度、夫の家事・育児への協力の程度およびそれへの満足感に関する項目は、それぞれ5ポイントスケールで評定させた。それぞれのタイプの得点は、表6に示した。分散分析の結果、家庭生活の満足感は、I統合型がIV未熟型よりも、夫の妻への理解の程度は、I統合型がII伝統的母親型よりも有意に高い得点を示した ( $F(3, 143)=3.50, p<0.05$ ;  $F(3, 143)=3.77, p<0.05$ )。しかし、夫の家事・育児への協力の程度およびそれへの満足感には有意差は見られなかった。

これらの結果は、I統合型は他のタイプに比べて家庭生活への満足感が高いことや、夫からの理解の程度

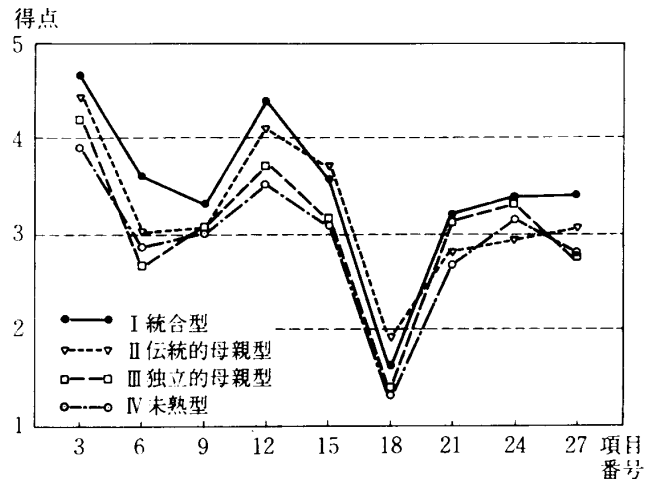


図2. 母性理念得点（否定項目）

<否定項目>(3) 妊娠した自分の姿は想像するだけでみじめである。(6) 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは不公平である。(9) 予定していない妊娠の場合は、人工中絶もやむを得ない。(12) 結婚生活を楽しむためには、子供をつくらぬほうがよい。(15) わが子を他人にあずけても、自分の仕事を続けるべきである。(18) 育児は妻だけでなく夫も分担すべきである。(21) 育児に追われていと、若さが早く失われる。(24) 育児から解放されるときに人間らしい自由な生活ができる。(27) 母親が子供の成長を生きがいにするのはまちがっている。

も高いと認知していることを示唆している。すなわち、家事・育児に対する夫の実際の協力という次元ではなく、より人格的な次元において夫から理解されたと認識できることが、育児期の女性を支えるものであると推察される。夫が妻の生き方を理解し、心理的に支えていくことが、育児期の女性にとって個としての自分と母親としての自分の両者を受容し、アイデンティティを統合させていくことにつながると考えられる。

## (4) SCTの反応内容に見られた各タイプの特徴

最後に、文章完成法SCTの反応内容を総合して、各タイプの特徴を分析した。SCT 6項目に対する反応内容は、それぞれ、表7に示したような視点・基準に従って分析・検討した。表7の右欄に、各タイプに該当する反応数(人数)の割合(%)を示した。表8は、各タイプのSCT各項目に対する反応内容の特徴をまとめたものである。表7および表8に示したようにSCTの反応内容は、各タイプによって著しい相違が見られた。

I統合型は、自分の人生と育児の両者を意義あるものとして肯定的に受けとめ、主体的、積極的に関与していることが特徴的であった。さらに自分の人生と育

表4. タイプ別の母性理念得点 (肯定項目)

タイプ	N		1	2	4	5	7	8	10	11	13	14	16	17	19	20	22	23	25	26	
I 統合型	47	M	4.76	4.53	4.59	4.61	3.36	3.38	2.95	3.61	3.48	4.70	2.78	4.72	4.42	3.42	4.14	4.27	4.44	3.31	
		SD	0.55	0.73	0.67	0.52	1.31	1.02	1.07	1.06	0.96	0.54	1.07	0.44	0.67	0.98	0.79	0.73	0.61	0.74	
II 伝統的 母親型	35	M	4.85	4.65	4.60	4.45	3.54	3.65	3.14	3.82	3.22	4.51	3.05	4.60	4.60	3.77	4.11	4.17	4.34	3.45	
		SD	0.42	0.71	0.80	0.73	1.20	0.82	1.22	0.84	0.67	0.60	1.16	0.83	0.59	0.98	0.74	0.99	0.62	0.80	
III 独立的 母親型	30	M	4.33	3.86	3.76	3.63	2.66	2.73	2.33	2.60	2.33	4.50	1.90	4.23	3.60	2.40	3.36	3.36	3.40	2.10	
		SD	0.64	0.99	0.98	1.22	0.90	0.99	0.90	0.91	0.86	0.67	0.74	0.80	1.17	1.01	0.91	1.01	0.75	0.83	
IV 未熟型	35	M	4.14	3.74	3.68	3.57	2.42	2.20	2.11	2.42	2.22	4.11	1.82	4.20	3.65	3.00	3.28	3.54	3.34	2.51	
		SD	0.85	1.05	1.25	1.04	1.07	0.97	0.97	0.80	0.75	0.74	0.87	0.82	1.09	1.14	0.94	1.02	0.92	0.93	
Total	147	M	4.54	4.23	4.21	4.12	3.04	3.03	2.67	3.17	2.89	4.47	2.44	4.46	4.11	3.19	3.77	3.89	3.94	2.91	
		SD	0.70	0.95	1.03	1.00	1.24	1.11	1.13	1.10	1.00	0.67	1.12	0.75	0.99	1.14	0.93	1.01	0.89	0.98	
有意差 検定	I vs. II																			***	
	I vs. III		***	***	***	***		***		***	***		***	**	***	***	***	***	***	***	***
	I vs. IV		***	***	***	***	***	***	***	***	***	**	***	**	***		***	***	***	***	***
	II vs. III		***	***	***	***	***	***	***	***	***		***		***	***	***	***	***	***	***
	II vs. IV		***	***	***	***	***	***	***	***	***		***		***	***	***	***	***	***	***

\*\* $p < 0.01$ , \*\*\* $p < 0.001$ .

表5. タイプ別の母性理念得点 (否定項目)

タイプ	N		3	6	9	12	15	18	21	24	27
I 統合型	47	M	4.68	3.59	3.31	4.36	3.57	1.61	3.17	3.36	3.38
		SD	0.50	1.04	1.05	0.81	0.76	0.67	1.15	1.09	0.81
II 伝統的 母親型	35	M	4.42	3.02	3.05	4.08	3.68	1.91	2.80	2.94	3.05
		SD	0.72	0.97	0.85	0.99	0.82	0.59	1.14	0.98	0.98
III 独立的 母親型	30	M	4.20	2.66	3.06	3.70	3.16	1.40	2.40	3.30	2.76
		SD	0.97	1.29	0.89	0.86	0.73	0.61	1.01	0.90	0.76
IV 未熟型	35	M	3.91	2.85	3.00	3.51	3.08	1.31	3.00	3.14	2.80
		SD	1.10	1.17	1.01	0.96	0.64	0.52	1.14	0.98	0.85
Total	147	M	4.34	3.09	3.12	3.95	3.40	1.57	2.95	3.19	3.04
		SD	0.88	1.17	0.97	0.96	0.78	0.74	1.20	1.02	0.89
有意差 検定	I vs. II										
	I vs. III			**		***					**
	I vs. IV		***	**	n.s.	***	***		n.s.	n.s.	**
	II vs. III						**	**			
	II vs. IV					***	**	**			

\*\* $p < 0.01$ , \*\*\* $p < 0.001$ .

## 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究

表6. 各タイプ別に見た家庭生活, 夫の理解, 家事・育児に対する協力への満足感

タイプ	人数		項 目			
			家庭生活 の満足感	夫の妻への 理解の程度	夫の家事・ 育児の協力 度	夫の家事・育 児の協力に対 する満足感
I 総合型	47	M	4.32	4.08	3.80	3.76
		SD	0.70	0.85	1.11	1.07
II 伝統的 母親型	35	M	3.85	3.45	3.40	3.34
		SD	0.77	0.78	1.11	1.05
III 独立的 母親型	30	M	3.93	3.73	3.66	3.66
		SD	1.04	0.98	1.37	1.32
IV 未熟型	35	M	3.74	3.57	3.85	3.34
		SD	1.01	1.03	1.16	1.23
Total	147	M	3.99	3.74	3.69	3.54
		SD	0.89	0.93	1.18	1.16
有意差 検定			I vs. IV*	I vs. II*	n.s.	n.s.

\* $p < 0.05$ .

表7. SCT 反応内容の分類の視点・基準

(単位: %)

SCT 項目	分類の視点・基準	反応例	I	II	III	IV
			総合型	伝統的 母親型	独立的 母親型	未熟型
私の 人生	Highest level 人生を肯定的, 積極的 にとらえ, 家族との生 活に幸福感, 充足感を 体験している.	H ・夫とともに歩みながら, 自分自身も成長してい くこと. ・悔いのないように頑張 りたい.	66.0	48.6	40.0	28.6
	Lowest level 人生を否定的, 悲観的 にとらえている. また は人生に対する漠然感 が特徴的である.	M ・こんなものかなと思う. ・子育てだけで終わら ない. ・私のもの.	29.8	42.9	43.3	42.9
		L ・こんなはずではなかつ た. ・どこでまちがったか. ・この先, どうなるのだ ろう.	4.2	8.5	16.7	28.5

表7. (つづき)

私の生きがい	Highest level	H	・家族の幸せであり、仕事の充実である。 ・私を必要とする人のために頑張ること。	76.6	54.3	46.7	31.4
	生きがい感をもっていることが、明確に表現されている。生きがいについての具体的な記述がある。	M	・これから見つけたい。 ・子供でもあるが、別のこともしたい。	23.4	28.6	26.7	31.4
	Lowest level	L	・まだ見つかっていない。 ・何だろう。 ・考えたことがない。	0.0	17.1	26.6	37.2
子供を育てることは私にとって	Highest level	H	・人生の課題であり、喜びでもある。 ・人生最大の仕事であり、私を大人に成長させてくれる。	80.9	68.6	46.7	31.4
	育児に対する積極的な姿勢が見られ、育児を自分自身の成長と関連させてとらえている。	M	・あたりまえのことである。 ・楽しさ3割、試練7割である。	17.0	28.6	30.0	31.4
	Lowest level	L	・かなり大変な仕事である。 ・与えられた試練である。 ・義務である。	2.1	2.8	23.3	37.2
子供がいなかったら	Highest level	H	・私の人生は今より淋しいものになっていただろう。 ・人の気持ちや痛みのわからない小さな人間になっていただろう。	55.3	68.6	36.7	48.6
	子育てに情緒的に積極的関与し、自分自身も成長したという親子の相互交流を示す記述内容。	M	・体型もくずれず手の指も美しいままであつただろう。 ・淋しかったかもしれないが、気楽でよかつたかもしれない。	17.0	14.3	23.3	14.3
	Lowest level	L	・別の楽しみをもっている。 ・もう少し自由に行動できた。 ・仕事を充実させていただろう。	27.7	17.1	40.0	37.1

## 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究

表7. (つづき)

私が母であるということ	Highest level	H	・子供たちは気にいらな いかかもしれないが、一 生懸命やっている。 ・子供たちの最強の友人 になりたい。	53.2	45.7	36.7	28.6
	母親としての自分を積 極的に受容し、親とし ての役割を一生懸命果 たそうとする姿勢が見 られる。	M	・私の責務である。 ・女に生まれたのだから、 当然である。 ・事実である。	34.0	28.6	30.0	31.4
	Lowest level	L	・未だに信じられない。 ・ほとんど罪である。 ・何かのまちがいではないか。 ・自分自身たよりない。	12.8	25.7	33.3	40.0
私にとって夫は	Highest level	H	・何でも話し合って共に 生きていく相手である。 ・心の支えであり、最愛 の人。 ・人生の最良のパートナ ーである。	80.9	62.9	53.3	43.0
	夫を信頼し、夫婦とし ての相互交流が見られ る記述内容。	M	・必要である。 ・子供の父親。 ・空気のようなもの。	19.1	31.4	26.7	34.3
	Lowest level	L	・他人である。 ・暴君である。 ・あくまで子供の父親に すぎない。	0.0	5.7	20.0	22.7
夫を拒否、または夫と 理解しあえていないこ とを示唆する記述内 容。							

H: high level, M: middle level, L: low level.

児が調和しており、育児によって自分自身が成長してきたことや、育児が生きがいになっていることが明確に意識されていた。また、SCTの各刺激項目に対して、家族に対する記述が多く、夫を信頼し、高く評価していることが推察された。

Ⅱ伝統的母親型は、自分の人生に対しては肯定的で満足しているが、Ⅰ型と比較すると、現在の生活や将来に対する主体性はそれほど高くない。また、自分の人生に対する明確な意識や展望が乏しいことが特徴的であった。育児に対しては、子供の気持ちを大切にす  
るよい母親であろうとする姿勢が4タイプの中で最も強く、自己意識の中に占める子供の存在の大きさがうかがわれた。育児に対してはアンビバレントな反応も多いが、このタイプのアンビバレントな感情は、「大

変だけれど楽しいもの」「夢いっぱいだが悩むことも多い」などの反応に示されているように、子育てにしっかりと関与し、積極的にとりくんでいることから体験されていた。これは、Ⅲ独立的母親型の、「子育ては苦楽に満ちているが生きがいではない」というような、育児への関与の浅さからくる気持ちの揺れとは異なるものであろう。Ⅱ伝統的母親型の夫に対する意識は肯定的であるが、子供の父親あるいは、いることがあたりまえの家族員としてとらえており、1人の人間としての受けとめ方は見られなかった。

Ⅲ独立的母親型は、上記のⅠ・Ⅱ型とは異なり、個としての生き方が前面に出ていることが特徴的であった。母親である自分は「不思議」という反応が象徴的に示しているように、母親としてのアイデンティティ

表8. タイプ別に見た SCT 反応の特徴

	「私の人生」	「私の生きがい」	「子供を育てること は私にとって」	「子供がいなかったら」	「私が母であること いうこと」	「私にとって夫 は」
I 総合型	「温かな家族に包まれ幸せを毎日かみしめている」「今も昔も家族や友人に支えられている」など、幸福感を感じている反応が多く、「夢に自分がどれだけ近づけるか試されている」など、前向きで積極的な姿勢が特徴的である。	「今のところ子供だが、「これから何か探していく」など、子育てがすべてではないという気持ちが推察される反応や家族を思いやる反応が多い。反応内容のほとんどは子供や家族に関するものであり、I群の対象者はすべて生きがいをもっている。	「自分自身の成長」「プラスの面が多い」など育児を自分自身を向上させていけるものとしてとらえている。また「一番大事なこと」「生きがい」「楽しい」など積極的な姿勢で育児に臨んでいる。「かなり大変」といった否定的な反応は1名のみである。	「今の自分はある得ない」「心の成長はなかった」など育児による自分自身の成長をうかがわせる反応が多い。一方、「いなりの人生を歩む」など、子供がすべてではないと思われる反応や「もっと自由な生活ができる」など母親役割を否定するような反応も少数見られた。	全体的に「良き母になるよう努力する」「責任をもちたい」など、母としての自分を積極的に受け入れ、高めていこうとし、「幸せなこと」「感謝したい」と感じているが、「今だに信じられない」「不思議」という反応も少数見られた。	「人生の良きパートナー」「大切な存在」「良き理解者」「心の支え」として夫を信頼し、高く評価していることが推察される。
II 伝統的母親型	「これで十分」「平凡で平和」など現状に満足している反応がほとんどである。また「家族のために働くこと」「子供のためにある」など自分を犠牲にしていると感じられる反応も見られた。	「子供の成長」としているが、I群に比べて今後、1人の人間としての生きがいを見つけようと感じさせるものが少ない。また「何だろう」「まだ見つかっていない」「考えたことがない」などの反応も見られた。	「大変だけれど楽しいもの」「夢いっぱいだが悩むことも多い」などI群にはあまり見られなかったアンビバレントな記述が多い。「自分自身の成長」とするものも見られた。	「淋しい」という反応がほとんどである。「それなりに楽しく暮らす」などの反応はわずかであり、子供の存在の大きさが推察される。自分自身の成長や母親役割を否定するような反応は全く見られない。	「子供にとって良き母であるかどうかはわからないが、がんばる」「子供たちによかったと思ってもらえれば」など、子供の気持を優先する反応が多い。	「良いパートナー」「一番の理解者」「頼りにしている人」であるが、「子供の父親」というI群には見られなかったとらえ方をしている。また「空気がたいない人」「こんなものかな」など夫の存在が意識されていないと感じられる反応も見られた。

が自己にしっかりと定着し受容されていないことが推察された。夫に対しても対等で、独立した生活者として意識されていた。

IV未熟型は、4タイプの中で否定的な意味合いの反応が最も多く見られ、不適応のタイプであると考えられる。自分の人生に対しても不満や漠然感が強く、将来展望もかなり悲観的であった。育児に対しても否定的、消極的であり、母親としての自分を受容できていない反応が多く見られた。夫に対しても拒否的であっ

たり理解し合えていないことが推察された。

このように、各タイプのSCT反応の内容は、表1に示した4タイプの定義を明確に裏づけるものであった。本研究によって示唆されたように、子供をもつすべての女性が母親であることを受容し、母親である自分を自己の生き方の中に統合しているわけではない。特にIV未熟型は、母親であることへの不適格感や母親役割を否定する傾向が強いこと、同時に自分の人生に対する不満や不適応感、漠然感も高いことが示唆され

## 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究

表8. (つづき)

	「私の人生」	「私の生きがい」	「子供を育てることとは私にとって」	「子供がいなかったら」	「私が母であるということ」	「私にとって夫は」
Ⅲ 独立 的母 親型	I・Ⅱ群には見られない「私のもの」という反応がかなり多い。「まだまだこれから」「充実した日々を送っていききたい」と人生を前向きに考えてはいるが、家族とともに歩んでいくことする姿勢は感じられない。	「子育ては苦楽に満ちているが生きがいではない」など、家族に関する記述は少ない。人生に対する積極的な姿勢が見られる一方で、「何だろう」「今はない」という漠然とした反応もある。	「自分自身の成長」とするものと、「義務の一つ」「時々苦痛になる」など育児を否定的・消極的にとらえるものに分かれている。I・Ⅱ群に比べ「楽しい」「生きがい」という反応はかなり少なく、育児に対する積極性は見られない。	「仕事をしていた」という反応が圧倒的に多い。また「淋しいかもしれないが、楽でよかったかも」というアンビバレントな反応も多く、母親役割を受容しきれないことが推察される。	「不思議」という記述が最も多く、「あまり思っていない」「時に煩わしいこともあるなど母親としての肯定的感情は少ない。よい母親でありたいという積極性は見られない。	「良きパートナー」とする記述はわずかであり、「ともに生きる相手であってほしい」「共同生活者」「ふつうの人」「同志である」など他群に比べて独立した生活者として意識している側面が見られる。
V 未 熟 型	「どこでまちがったのか」「思いどおりにならない」など現状に対する不満が感じられる。また「この先どうなるの」「これからが一番きつい」など不安で悲観的な反応も目立つ。Ⅲ群と同様、子供や家族に関する記述はほとんどなく、自分に対しても「何だろう」「わからない」など漠然感が特徴的である。	「何だろう」という反応が最も多い。「子供の成長」とする者も他群に比べて僅かである。現時点で生きがいを見出せていないことが推察される。	「難しい」「重荷」「試練」など育児に対して否定的、消極的であり、「仕事」としてとらえている者も見られる。Ⅲ群と同様、「楽しい」「生きがい」という反応は少ない。	「淋しい」「毎日が退屈でつまらない」という反応も見られるが、「遊んでいるかも」「もう少し自由な行動ができた」「と思うことがある」など母親役割を否定する反応がI・Ⅱ群に比較して多く見られた。	「不思議」「ほとんど罪」「まちがったすところ」など他群に比べて母親としての自分を受容できていない反応が最も多い。「事実」「一生変わらない」という事実を述べているだけの反応も見られた。	「良きパートナー」という反応が多い反面、「いなくてもよい」「永遠の大きな謎」など、否定的な内容や理解し合えていないことが推察される反応も見られた。

た。また、Ⅲ独立の母親型は、育児に対して否定的、消極的であり、母親であることにアンビバレントな感情が強く、葛藤状況にあることが推察された。Ⅰ統合型は、個としての自己と母親としての自己が調和し統合されており、4タイプの中で最も成熟したアイデンティティを達成していると考えられる。以上のように、個としての自己と母親としての自己の統合のあり方は、育児期にある女性のアイデンティティの状態像を示す重要な視点の一つであると思われる。

これら4タイプの女性の家族との関係を分析すると、Ⅰ統合型が夫を最も積極的、肯定的に受けとめており、家族に対する積極的な関与がしっかりとできていることが示唆された。Ⅱ伝統的母親型も、家族や夫に対する意識は肯定的であるが、Ⅰ型に比べて主体性の程度は低い。Ⅲ独立の母親型は、夫と対等であることが意識されており、自立性が感じられるが、子供に対する姿勢は、否定的、消極的な面が多い。またⅣ未熟型は、夫や子供に対して拒否的であったり、積極的関与が不

十分であることが示唆された。

以上の結果を総合すると、育児期の女性のアイデンティティの統合には、家族とのかかわり方、特に夫との関係が重要な意味をもっていることが示唆された。しかしながら、本研究によって見出された家庭生活や夫との関係に対する認知は、全体的な意識の把握にとどまっており、さらなる検討の余地を残している。特に、女性のアイデンティティ様態は、夫婦の相互作用のあり方や夫自身のアイデンティティ様態との関連性など、さまざまな角度からさらに考察していく必要がある。

成人女性のアイデンティティ発達に関する研究は、まだその途についたばかりであり、検討されるべき数多くの課題が残されている。はじめに述べたように、女性のアイデンティティは、個の確立と同時に、他者との関係性によって発達していく側面が強い。またその特質は、各ライフステージにおいてかなり異なってくると思われる。その意味においても、家族関係の視点から女性のアイデンティティの発達・変容を考察していくことは、今後の重要な課題であると考えられる。

本研究では、個としてのアイデンティティ達成度と母性意識の高さによって、育児期の女性のアイデンティティ様態に関する4タイプを設定した。また、母性理念得点の高い人は母親アイデンティティがよく達成されていると仮説的にとらえた。これらの方法論的妥当性の検討、すなわち4タイプの独立性や母性理念と母親アイデンティティの関連性の検討もまた、今後に残された重要な課題である。

#### 4. 要 約

本研究は、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティの統合・葛藤という視点から、育児期の女性のアイデンティティ様態と家族関係の関連性について検討することを目的とした。

3～5歳の子供をもつ147名の母親を対象に質問紙調査を行った。対象者はアイデンティティ尺度(Rasmussen<sup>8)</sup>と母性理念質問紙(花沢<sup>9)</sup>)の得点にもとづいて、Ⅰ統合型、Ⅱ伝統的母親型、Ⅲ独立的母親型、Ⅳ未熟型の4タイプに分類された。

主要な結果は以下のとおりである。

(1) Ⅰ統合型の母親は、Ⅳ未熟型の母親よりも家庭

生活によく満足しており、Ⅱ伝統的母親型の母親よりも夫からよく理解・受容されていると認知していた。

(2) 家族とのかかわり方や家族の認知のし方は、4タイプ間で著しい相違が見られた。Ⅰ統合型が、夫を最も肯定的に受けとめており、家族に対する積極的関与が最もよくできていた。Ⅳ未熟型は、夫・子供に対して拒否的であったり、積極的関与が不十分である者が最も多かった。

これらの結果を総合して、夫との肯定的な関係や家族に対する積極的関与は、個としてのアイデンティティと母親としてのアイデンティティの統合を支えるものであることが示唆された。

本研究は、平成7年度文部省科学研究費補助金一般研究(C)「成人女性のアイデンティティ発達過程と危機様態に関する研究」(課題番号07610132, 研究代表者 岡本祐子)の一部として行われたものである。研究協力者として、データ収集にご協力いただいた蜂屋陽子さんに感謝いたします。

#### 引用文献

- 1) Levinson, D.J. (南 博訳): 人生の四季, 講談社, 東京, 90 (1980; 原著, 1978)
- 2) Sheehy, G. (深沢道子訳): パッセージー人生の危機, プレジデント社, 東京, 213~273 (1978; 原著, 1974)
- 3) Vaillant, G.E.: Adaptation to Life, Little Brown, Boston, 195~236 (1977)
- 4) 大日向雅美: 母性の研究, 川島書店, 東京, 107~134 (1988)
- 5) 岡本祐子: 女性のためのライフサイクル心理学 (岡本祐子, 松下美知子編), 福村出版, 東京, 12~21 (1994)
- 6) 牧野カツコ: 現代のエスプリ, **236**, 173~183 (1987)
- 7) Erikson, E.H. (仁科弥生訳): 幼児期と社会 1, みすず書房, 東京, 351 (1977; 原著, 1950)
- 8) Rasmussen, J.E.: *Psychol. Rep.*, **15**, 815~825 (1964)
- 9) 花沢成一: 母性心理学, 医学書院, 東京, 12~16 (1992)
- 10) Marcia, J.E.: Determination and Construct Validity of Ego Identity Status, Doctoral Dissertation, The Ohio State University, Dayton, Ohio, 18~26 (1964)
- 11) 鐘幹八郎, 山本 力, 宮下一博: 自我同一性研究の展望, ナカニシヤ出版, 京都, 86~95 (1984)
- 12) 鐘幹八郎, 宮下一博, 岡本祐子: アイデンティティ研究の展望Ⅱ, ナカニシヤ出版, 京都, 54~59 (1995)